

木藤才蔵君の「連歌史論考」に対する授賞審査要旨

木藤才蔵君著「連歌史論考」は日本詩歌史上特殊の形態である連歌の成立し展開し固定する過程を精細に考究し、組織づけられた上下巻千百数十頁にわたる大著である。上巻は昭和四十六年十一月、下巻は昭和四十八年四月に刊行されている。上巻は序言及び八章よりなり、下巻は六章よりなり、終りに詳細な連歌史年表と数種の索引がある。

序言では連歌の形成と展開とを総括的に展望し、本論では古代における連歌の発生から近世初期の連歌の固定に至るまでを問題史的に精細に考察している。第一章では連歌の起原や平安時代における短連歌の形成を考察し、特に前句の構成の上から源俊賴の連歌の特色を詳しく扱っている。第二章では鎖連歌から百韻の連歌への形成過程をとき、有心連歌、無心連歌の流行や鎌倉初期の連歌の法則や菟玖波集所収の鎌倉初期の連歌について考察している。第三章では鎌倉中期の連歌を扱い、賦物連歌や地下連歌の盛行や連歌の本式新式の制定を考察し、第四章では鎌倉末期の連歌や南北朝連歌の形成をとき、二条良基による菟玖波集の成立や救済の考察に力を入れている。第五章は南北朝の連歌を考察し良阿や周阿の研究に精細である。第六章では応永の連歌を中心に扱い梵燈庵の研究に力をそいでいる。第七章では中興期の連歌師を扱い、宗砌、心敬、専順の研究に力を入れて居り、第八章では新撰菟玖波集の考察を行い、宗祇・兼載の研究に精しい。

第九章では連歌新式の増補改訂と尚柏の伝記とその作風を精細に扱い、第十章では永正享祿期の連歌を扱い、宗長

・宗碩など宗祇の門人の研究に力を入れている。第十一章では室町後期の堺、伊勢、奈良、大坂、薩摩、大隅、日向等の地方連歌を扱い、第十二章では天文、永祿期の連歌を扱い、宗牧、周桂、昌休、宗養その他の連歌師を精細に考察している。第十三章では固定期の連歌を扱い、紹巴の研究に力をそそいでいる。第十四章では貞門俳諧と連歌との交渉を扱い、俳諧式目書の成立を考察している。

以上の考察を通して、その特色とすべき点を挙げると、第一にその時代と連歌との交渉を詳しく説いている。連歌はその成立は古く、古代にさかのぼるが、特に中世に隆盛を極めたのは連歌特に長連歌が中世の時代や生活や美意識に適した文学形態であったためであり、その点に深い考察を行っている。第二に各連歌師の作品を博く読んで各々の作風を明らかにしている。第三に従来研究のゆきとどかなかった連歌師たとえば良阿、周阿、梵燈庵、肖柏などの研究を精細に行い、創見がある。第四に今まで未開拓であった宗祇以後の連歌の展開に詳細で創見が多い。これらは本書の意義と価値とを重からしめている。また連歌史年表は草創期から固定期に至る約八百年間の連歌史上の事実を精細に記し連歌会の行われた日時を一々挙げるなど本論の叙述を補う点が多い。連歌史については昭和のはじめに福井久蔵氏の「連歌の史的研究」が成り、それ以後、部分的に連歌の研究は精緻になり新しい資料も多く紹介されたが、組織的な連歌史は殆んど世に出なかった。著者は約三十年連歌史の研究に専念し従来の研究の基礎の上に新しく考察を加えて本書を完成したのであり、現在における連歌史研究の最高水準を示すものである。